

## 医療ルネサンス

No.5776

## 大腸がんの転移

2 / 5

## 抗がん剤で縮小させ手術

神奈川県鎌倉市の金谷佳江さん(73)は2010年11月、右脇腹に痛みを感じ、かかりつけの病院で超音波検査などを受けた。

1週間後に検査結果を聞きに行くと、「結腸がん」が見つかったという。大腸は肛門に近い方から直腸と結腸に大きく分かれるが、結腸にできたがんを指す。

しかも、それが肝臓に多数転移していた。医師から「余命は長くて2年」と告げられた。

泣くことはなかった。夫を40歳代でがんで、次男も事故で亡くしており、「今度のは私の番」と受け入れた。長男夫婦に伝えると、がん研有明病院(東京都江東区)にすぐ予約してくれた。

12月半ばに入院した。

同病院で調べると、肝転移は大きなものが2個、小さなものは無数にあった。手術は不可能で抗がん剤治療を受けるしかなかった。

旅行や写真が趣味の金谷さん。今年2月には長野県の蓼科高原に一人で旅行に出かけた(金谷さん提供)



療を受けるしかなかった。

通院治療中、精神的に不安定になり、がん患者の心をケアする腫瘍精神科にも通った。ところが翌年4月、「がんが小さくなったので手術できますよ」と突然言われて驚いた。

6月に手術を受け、結腸がんと肝転移を切除した。肝臓は半分近くを取ったが、病理検査の結果、がん細胞はほとんど消えていた。手術直後に念のため、抗がん剤治療を1回受けて治療を終えた。それ以来、再発はしていない。

写真撮影や旅行が好きな金谷さんは、元気になって国内外の旅を楽しんでいる。昨年11月には初孫の顔を見られた。この時ばかりは、命があることに感謝し、泣いてしまった。

大腸がんに対する抗がん剤治療は近年、大きく進歩した。がんの増殖などを抑

える分子標的薬も含め、複数の薬を組み合わせる治療法でがんを小さくし、その上で手術できるケースが増えている。

東京都内のゲームソフト会社勤務の筒井誠さん(59)も08年、同病院で結腸がんと肝転移が見つかった。手術は不可能だった。

抗がん剤治療を1年受けた時点で、がんはかなり縮小した。一方、下がり続けていた血液中の腫瘍マーカーが上がり始めていた。手術するなら今しかない」と医師に言われ、09年7月、12時間かかりの手術を受けた。肝臓は全体の7割も切った。11年には肺転移も1か所見つかり、内視鏡を使った手術で切除したが、以来、再発はない。

同病院肝臓腫瘍担当部長の齋浦明夫さんは「最初の抗がん剤治療なら半数の患者に効果があるので、すぐに手術はせず、抗がん剤治療の効果を見極めて、その後、手術を検討しても良い」と指摘する。